

大内地区の 史跡



中面マップ中の番号

凡例

- 古墳時代
- 古代
- 中世
- 近世
- 近現代
- 年代不詳

こう だ やま こ ふん ぐん 神田山古墳群



- 1 茅野神田
4世紀初め(古墳時代)

この古墳群は、4世紀初めのもので、昭和55年(1980)の発掘調査によって発見されました。古墳はいずれも小さな墳丘を持つ円墳で、内部は組み合わせ箱式石棺です。第1号墳の蓋石には盃状穴が刻まれており、これはわが国で最初の発見となりました。組み合わせ箱式石棺は大内中学校、盃状穴はスーパーまるきの裏にある石橋に見ることができます。

おお うち ひ かみ こ ふん 大内氷上古墳



- 2 氷上
5世紀中後期(古墳時代)

山根観音堂の裏山にある、大内地区唯一の前方後円墳です。前方後円墳は市内でも大変珍しく、この古墳は県の史跡に指定されています。築造は5世紀中後期で、全長28m、後円部15m、前方部14mと小型ですが、畿内型竪穴式石室を採用しながら山口地域の箱式石棺の面影を残しており、古墳時代の地方と中央との関係を考えるうえで貴重な史跡です。

おお つか こ ふん 大塚古墳



- 3 長野
5世紀後半(古墳時代)

この古墳は、5世紀後半に造られた最大直径30mの市内で一番大きな円墳で、千人塚とも呼ばれています。頂上の祠は、享保10年(1725)に薬師堂を建てるためにここを掘ったところ箱型の組合石棺が出てきたことから、当時の人が祟りを恐れてその石で祠堂を造り供養したものとされています。墳丘には二義少年の墓もあります。

ひ かみ ざん こう りゅう じ 氷上山興隆寺



- 4 氷上/613年(古代)

推古天皇21年(613)、大内氏の始祖琳聖太子の創建と伝えられています。天長4年(827)頃、11代茂村のとき都濃郡降松(現下松市)の鷲頭山から妙見社を勧請し、興隆寺を大内氏の氏寺に、妙見社を氏神にしたと伝えられます。ここには、琳聖太子の刀剣に始まり大内氏最後の当主31代義隆が寄進した梵鐘まで、多くの文化財があります。

こう りゅう じ こん じゃく 興隆寺の今昔



- 4 氷上/613年～(古代～)

大内氏の時代、この谷間一帯は大いに栄えました。また、幕末には七卿が藩主と国事を論ずるなど歴史の転換点の重要な舞台となりました。しかし、明治に入り衰退。釈迦堂は龍福寺本堂(国の重要文化財)、東照宮は築山神社、観音堂は山根観音堂、山王社の拝殿と手水鉢は御堀神社、護摩堂は神福寺観音堂へと、それぞれ移築されました。

みょう けん しゃ 妙見社



- 4 氷上
827年(古代)

北辰妙見大菩薩を祭神とし、歴代当主により厚く崇拝されました。もとは、興隆寺の裏山にありましたが、明治に入り現在の地に移されました。拝殿は山口特有の檜葺形式です。境内にある梵鐘は、31代義隆が寄進したもので朝鮮鐘の特徴が多く加味されており、大内時代の工芸を代表する傑作として、国の重要文化財に指定されています。

みょう けん しゃ じょう ぐう あと 妙見社上宮跡



- 4 氷上
827年～(古代～)

興隆寺境内の最奥部氷上山の中腹にある大内氏の時代の遺構です。その時代は、一般の参拝は禁止されており、二月会では当主と嫡子が氏神祭祀の秘儀を行っていました。石段の手前には、龍所跡や氷上山の名前の由来となった不動水があり、昭和61年(1986)の発掘調査では中世に作られた可能性がある高さ50cm程度の大変めずらしい狛犬も確認されています。

た もん じ あと 多聞寺跡



- 5 問田
703年(古代)

大宝3年(703)、11代茂村の時、東大寺四聖の一人、行基の創建と伝えられています。31代義隆の頃には境内での酒宴、音曲が禁止されるほど多くの参拝者がありましたが、現在は荒廃し、建物の一部と空海が眼を洗ったと伝えられる池、枝垂桜や銀杏の木を残すのみです。ここ今山は眺望絶佳、大内地区を遙かに見下ろすことができます。

つち まん じゅう 土饅頭



- 6 御堀
平安時代初期(古代)

御堀峠周辺の洪積層地下数10cmの所から、饅頭石または団子石とも呼ばれる団塊が出てきます。直径は2～3cmで、球状ないし卵形、淡黄白色で餡に相当する部分は茶褐色です。これは大内氏の氷上山北辰尊星の祭りのお供え、あるいは弘法大師(空海)の土饅頭の民話として今に伝えられています。見た目は大変おいしそうですが、残念ながら食べることはできません。